

発達障害者という「強いられた社会学者」のための「社会学 1.5」

——「社会学 1.5」の日常実践を可能とする基盤としての社会学を求めて——

立教大学大学院社会学研究科

田野 綾人

1. 目的

本報告は、「自閉症者とは強いられた社会学者」(竹中 2016:46)という主張を起点とする。そして、それでは、どのような社会学が発達障害者をより生きやすくするのか—くるしさを減らすことが出来るのか—という問題解決のために、「社会学 1.5」的理解が浸透した社会を提言する。なぜならば、発達障害者にとっては、属性と問題解決が既に定まっているかのような単純な<異化&統合>路線を超えたものが必要であり、問題解決は個別性に注目するほかあり得ないと強調する一方で、その個別性を重視していく土壌となる社会が作られなければならないためである。

2. 前提・方法

報告者は発達障害者である。しかしながら、発達障害者は(報告者のように望んで社会学者にならなくとも)「強いられた社会学者」とみなしうる。なぜなら、日常において「常識」とは異なった行動を取ることに由来する「(意図的ではない)違背実験」の実践者となるためだ。この点において、発達障害者は「単純な自明性の罠からの解放」(「社会学 1.0」)は達成できているともいえる。しかしながら、それだけではくるしはなくなる。常識とは異なった行動を取り続けることは、残念ながら被害を受ける可能性も、加害を行う可能性も高まるからである。

だからといって、「「常識は正しい」は正しくない」は正しくない=「常識は正しい」(佐藤 2013:24)という「社会学 2.0」を採ったところで、それは別のくるしみを生み出す。つまり、『ふつつ』であることが正しい。なんで私は『ふつつ』になれないんだ」という『社会』との違和感が解消されない限り終わりのない自己嫌悪である。あるいは、過剰な同化をしてしまうことだ。

そうであるならば、この「強いられた社会学者」はどのようにすればくるしきならず生きていけるのだろうか。<異化&統合>に向けて動けるのだろうか。発達障害に関わる問題は、他の「障害」や差別問題とは異なり、属性を根拠とし社会に対して物質的環境の改善を求め「障害」をなくしたり、反差別運動のような、自らの属性そのものを肯定することによって解決するものではない。なぜなら、発達障害ではなにが生活に困難さを引き起こしているのか、一様に定義できないためだ。そのために、個別の場面ごとに丁寧に(そして地道に！)解決方法を検証するほかない。このことから発達障害者は「社会学 1.5」を生きることが望ましく見える。しかし、それは「社会学 1.5」により得た合理性を承認する社会がなければ孤立無援である。発達障害者が<異化&統合>に向けて進むためには、社会学や社会も「社会学 1.5」に向けて共に進まねばならない。

本報告では、まず前半では発達障害の手記に表れる「個人」の生き方としての「社会学 1.5」を紹介し、後半では、社会学理論での「社会学 1.5」と社会の「社会学 1.5」化の必要性を論じる。

3. 結論

従来の<異化&統合>策には限界があった。それは、属性に基づいた「障害」/差別解消策を採らざるを得なかったという点である。つまり、発達障害者が求めるような、個別場面における合理性を主張し、それを承認できるような社会についての言及が不十分であったと言えよう。しかしながら、「社会学 1.5」は新たな統合性への道を明らかにする。このことは、社会学が「新しい共同性に向けた意味世界の再構築に参画する学問」(盛山 2013:310)であるためには「社会学 1.5」化による洗練が必要であることを示し、「強いられない」社会学の発展にも寄与するだろう。

【引用文献】

盛山和夫、2013『社会学的方法的立場 客観性とはなにか』東京大学出版会。

佐藤俊樹、2013「常識をうまく手放す」山本泰・佐藤健二・佐藤俊樹編著『社会学ワンダーランド』新世社。

竹中均、2016『自閉症とラノベの社会学』晃洋書房。